

保険毎日新聞「みちくさ保険物語」71

保険史料からみた漫画の歴史(10) 富国火災の募集史料

連載が 70 回を超えた。最初から長く続けることが目標ではあったが、自分の年齢を超えてさらに続けさせていただけることに、読者の皆様と保険毎日新聞社の関係者様に感謝申し上げます。読者の皆様の苦情が寄せられないかぎり、当面は 100 回を目指して頑張ります。

将来まとめて出版を考えているが、その前にこれまでの記事（第 1 回から第 70 回の連載まで）を一橋大学附属図書館の機関レポジトリに登録して公開することにした。厳密に言えば、『保険毎日新聞』に掲載された原稿の直前の原稿（つまり「校正前の原稿」）を自由に閲覧していただけることになる。キーワードもつけてあるので、利用条件にしたがってご利用いただきたい。なお画像は新聞と違いカラーで紹介できるが、そのほとんどは、特段の断りがない限り米山の所蔵史料である。再利用については、一橋大学附属図書館の担当者をとおして、ご連絡をいただければ幸いである。（9 月末日ぐらいから利用可能の予定。）

今回は、「保険史料からみた漫画の歴史」の続きとして、富国火災の募集資料の漫画を取り上げる。管見のかぎり、損害保険会社が漫画をつかって募集資料を作成することはきわめて珍しい。生命保険の募集対象は主として家計であるため、漫画を活用して保険の効用をわかりやすく説明することが多い。実際に戦前の多くの生保会社が募集資料に漫画を用いており、中には著名な漫画家として名をのこした人もいる。

損害保険会社の顧客には、法人企業が大きな位置をしめている。とりわけ海上保険は、法人顧客市場の中心といってよい。火災保険については、工場や倉庫などの法人顧客へのカバーがある一方で、個人所有の家屋へのカバーもある。ちなみに、戦前においては、自動車保険はほとんど大きな意味を持っていなかった。そのため、損害保険会社の顧客にしめる家計の比重は現代の損保より小さなものであった。

このようなこともあってか、火災保険の募集文書では、漫画の使用は少なく、上品な図柄が多かった。中にはわざわざ本格的な画家を起用する会社もあった。東京動産火災の伊東深水、東京火災の東郷青児などはその好例である（掲載画像を参照）。富国火災が、上品さを犠牲にしてまで、保険の効用を漫画で訴えた理由はいろいろ考えられるが、主な理由としては、同社が経営上の理由で、大衆物件に対する火災保険営業の比率を高めていたことが推測される。

同社の前身は、1897 年 5 月に設立された小樽貨物火災保険株式会社（以下、小樽貨物火災と略記）であり、1922 年 1 月に富国火災保険株式会社（以下、富国火災と略記）と社名の変更がなされた。小樽貨物火災は、海上保険会社の提示する協定保険料率を不満とした小樽の海運業者が自家保険を行うために設立された会社である。既存保険会社のカルテルを不満として損害保険会社が設立される事例は洋の東西を問わず存在する。我が国では日本海上がそうであり、イギリスではロイヤル保険会社 Royal Insurance の事例がある。

小樽貨物火災の初期経営を示す営業報告書は残っていないが、皮肉な言い方が残って

保険毎日新聞「みちくさ保険物語」71

いないこと自体が、順調ではなかったということの間接的な傍証である。管見の限り営業報告書は、富国火災と社名を変更する直前の大正 7 年度のものからであるが、業績一覧によると火災保険営業が中心であり、年始の火保契約件数が 2,906 件と大きな成績ではない（小樽貨物火災『第 27 回事業報告書』大正 7 年 7 月 1 日～8 年 6 月 30 日）。前年度において同社は「社礎の堅実を期し資本増加を決行」し、「鋭意営業発展の策を講じ内外共に面目を一新」した結果、火災保険の業績が頗る好成績をおさめた（『第 27 回事業報告書』）。大正 7 年度の新契約件数は 71,951 件となり、年始保有件数の 20 倍をはるかに上回った。大正 8 年度には、「前期末において一般動産不動産火災保険（中略）の認可を得」て、「直ちに東京に支店を設置し同業各社と再保険の取引を開始し本店においては鋭意諸準備を了し、一般火災保険は 7 月下旬より（中略）営業を開始」（『第 28 回事業報告書』）した。大正 8 年年度の営業戦略の転換は、火災保険料の増収をもたらしたが、同時に保険金支払いも増大し収支に関しては好結果をもたらさなかった。さらに、大正 9 年は火災保険料収入の落ち込みと函館火災の影響で「遺憾ながら」業績は振るわなかった（『第 29 回事業報告書』）。

そこで、大正 10 年度には、「営業本部を東京市に移すと共に大阪出張所を支店に昇格せしめ、神戸、横浜には出張所を新設」するなど「営業上に一大改革」をなした（『第 30 回事業報告書』）。この営業方針の変更は、小樽中心のビジネスから脱し、火災保険営業を全国的に展開しようという試みであり、社名変更は、この戦略と整合するものであった。当時の火災保険市場は、協定料率によって比較的安定していた。また法人優良物件は既存の大手会社が大きなシェアを占めていたが、大衆物件については小樽貨物のような小企業が進出する余地があった。これらの状況を考えると、小樽貨物火災が東京に営業基盤を移して、火災保険営業に集中しようとする戦略自体は見当外れなものではなかった。

しかしながら、この戦略はタイミング的には大失敗だった。それは東京で大衆物件の引受を拡充した矢先に、関東大震災がおこったからである。『第 32 回事業報告書』は次のように述べている。「本年度は前年の倍額増収の目的を以て猛進することに本支店いずれも非常の意気込みなりしに、新年度僅かに 2 か月これより猶秋獲の期に入らんとする 9 月 1 日突如前代未聞の関東地方大震災に襲われ、自然人心の安定、通信、交通機関の回復までは一時営業を休止」した。

掲載した漫画の募集資料は、昭和時代のものと思われるが、同社が大衆火災保険物件に集中していたことを示している。漫画は、前半 6 コマ、後半 4 コマで話が区切られている。漫画のレイアウトは、保険会社の漫画では古典的なレイアウトといえる、上段が「保険の効用」、下段が「無保険の悲劇」というものである。二人の男が、頑張って仕事と商売に励み、妻帯を遂げて、住宅や商店を立てるところまでは同じ。しかし次のコマで、一方は火災保険を契約し、他方は保険契約をしないことから命運が分かれることになる。上段は、「家は焼けても保険は残り」、「復興は先ず富国の証券から」と続くが、下段は、「月に叢雲、花に嵐」となり「10 年の苦労も水の泡」となる。

この募集文書には、養蚕家との関係を強調した次のような文章が掲載されている。「弊社

の如くその背景に六十余年の久しきに亘り我国本産業二百万養蚕家と共に国富に貢献して居ります片倉製絲を初め関係事業並びに広範なるご縁故者の力強いご後援はここに世界に比すべきものなき恩恵にて衷心感謝に絶えざるものがあります。」

富国火災は1944年1月に片倉製絲と関係の深い大倉火災と合併するが、合併よりもはるか前から大倉火災等となんらかの営業的な関係を構築していたようである。

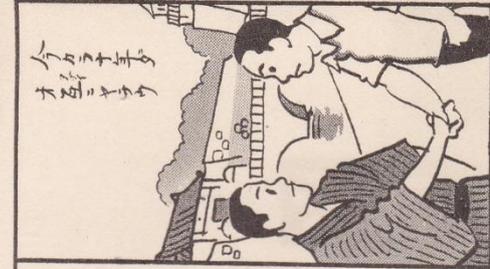
代理店の勧め



東京動産火災の販売促進用資料の表紙。伊東深水画伯の絵が使われている。



東郷青児は、旧安田火災の前身会社である東京火災の保険案内のために絵を提供した。



今カキ子守
才五ニヤラウ



腰
腕
来



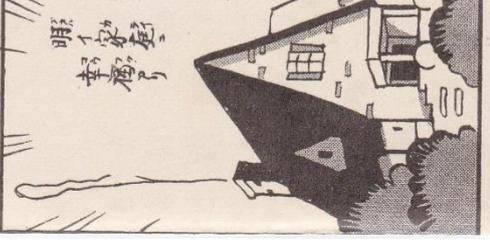
熊
難
王
三
不
丸



謀
安
六
共
増
天



道
度
子
化
粧
癖

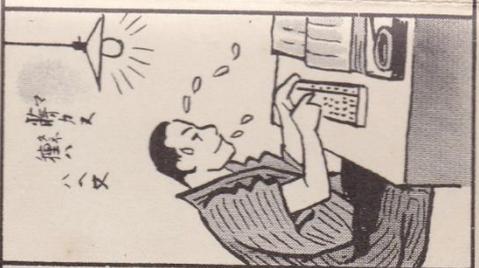


眼
家
庭
喜
高
了

千慮ノ一失
十年後ノ再會ヲ約シテ
東西ニ別レタ二人！
負ケテナルモノカト



向
針
巻
腕
ま
り



藤
竹
文
徳
ハ
文



金
金
生
送
人
金
公



愛
嬌
多
り
胸
賣
昌
三



輝
成
切
響
曙
景

緊
禪
一
番

奮
勵
力
努

ソ
ッ
ア
斐
甲

結
婚
ハ
新
築

新
築
順
調
進
ダ

富国火災の営業資料に掲載された漫画の前半部分



富国火災の営業資料に掲載された漫画の後半部分